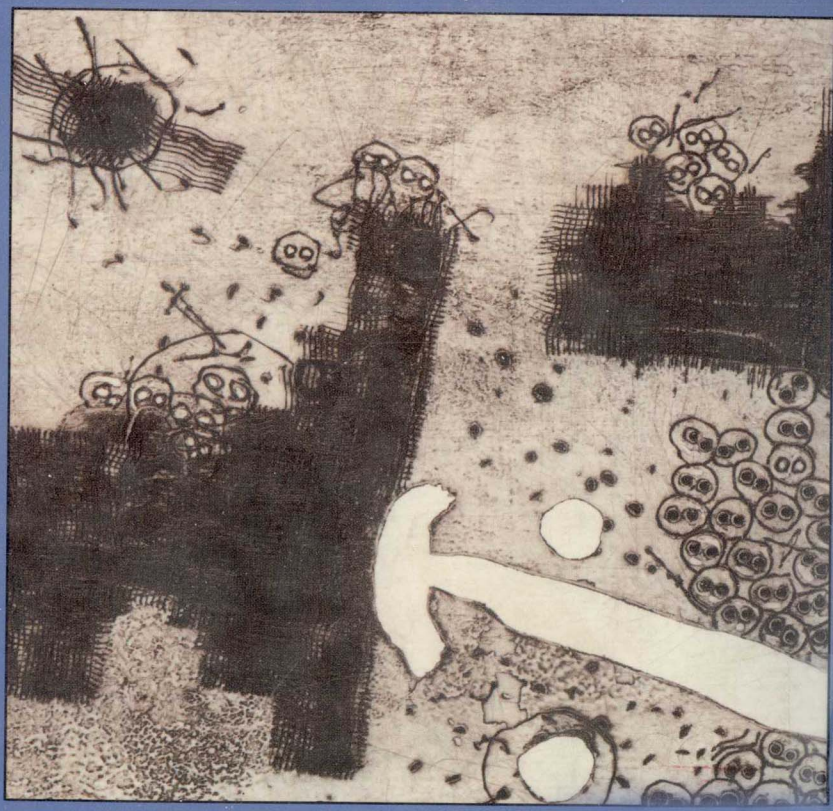
書き下し長編推理

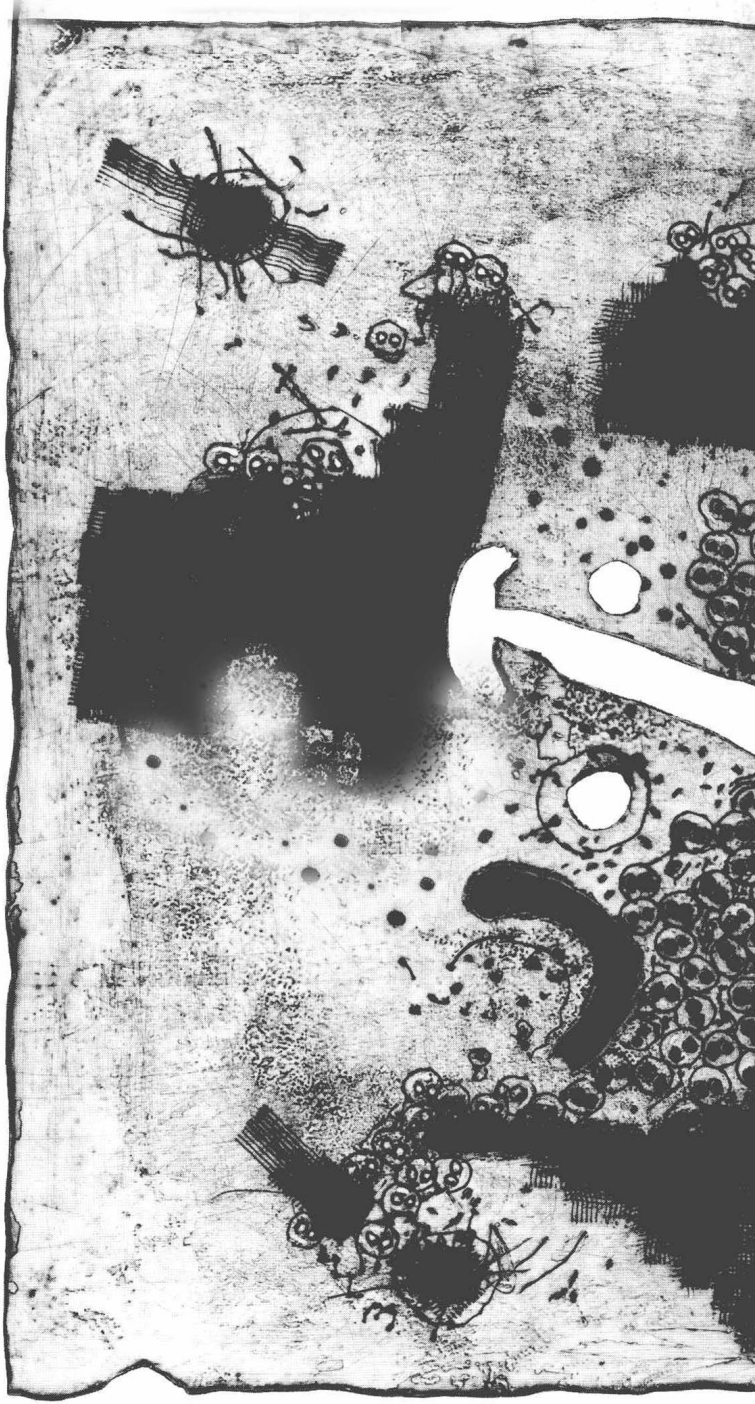
死者の柩を揺り動かすな

麗羅



「者の柩を揺り動かすな

麗　羅



麗羅（れいら）
大正13年生れ。東京高工付属工科学校卒業後，日本軍に入隊。復員後，米軍府中基地勤務。以後，不動産業など各種職業を経験。昭和48年5月，「ルパング島の幽霊」で第4回サンデー毎日新人賞（推理部門）を受賞。

死者の柩を揺り動かすな

一九七七年七月一〇日　初版印刷
一九七七年七月二五日　初版発行

定価　七八〇円

著者　麗羅

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三〇―六三六一
販売部　二三〇―六一七一

印刷所　大文堂印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1977 REI LA, Printed in Japan

0093―775001―3041

目

次

第一章　轢断死体　7
第二章　黒い手帳　32
第三章　蓮華院　58
第四章　銘酒屋の女　84
第五章　公安一課二係　115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　老娼婦　144
第七章　罪障の承継　171
第八章　木母寺　193
第九章　殺意の追加　225
第一〇章　憎悪の源流　250

装画　赤坂三好

装丁　山岡茂

死者の柩を揺り動かすな

第一章　轢断死体

1

夜だった。

晴れきっていたから天がたいそう低く見え、星が無数にきらめいていたから地表はいっそう暗かった。

暗闇のなかの堤防の上で、その小さな男の子は杭木に括りつけられていた。杭木を背にしてその子を立たせ、兵児帯でぐるぐる巻きにしただけの簡単な縛りかただったが、生後まだ二年にもならない彼には、自力でそれを解く知恵も力もなかった。

男の子は、これだけは自由に動かせる両手で目をこすりながら、声をあげて泣いていた。ずいぶんと長い時間を泣いたのだった。最初は、火がついたように癇高くまるで悶絶するような声をあげたのだが、いまは、ゆっくりとしゃくり上げては陰々と長い尾を引く——幼児特有のあの低くうら悲しい泣き声になっていた。

幼児の背後には、闇黒の空間の亀裂にも似た水流が横たわっていた。このあたりは広大な平野の真っ只中である。数日前に降った雨で量が増しているが、水はゆったりとたゆとうて過ぎっていって砂を洗う音すら立てない。

風も動きを止めていた。岸辺には、葦の群れがまだ青々と立ち残っているはずだが、その葉ずれのざわめきの声も聞こえない。

彼の前方には、はるか遠くの果てまで稲田が続いているはずだった。まだ秋に入ったばかりの季節である。刈り入れ前の稲穂がたわわに稔って黄金のうねりをつくっているのだろうが、それとても見えない。

すべての形と音とが、黒い陰影のなかに溶けこんでしまっていた。男の子の耳に聞こえるものは、ただ彼自身があげている泣き声だけだった。

この子はまだ、孤独がもたらす悲哀や、困惑の果ての絶望などといった心理的事象を、明確に意識するまでには成長していない。彼の年代では感覚だけが認識のすべてである。彼が泣いているのは、暗闇に対して本能的に感じる恐怖のためであり、庇護者の所在を見失っての彼自身がなし得る唯一の生命表現なのである。

泣き続ける以外には方法がなかった。

彼には、ついさっきまでの、温かい背に負ぶわれて過ごした記憶があった。相手の肌の温もりを全身で感じて、この上もない安らぎの中に眠っていた時間だった……。

「なんだ。餓鬼を連れてきたのか！　餓鬼なんぞ旅館に置いて、一人でくればよかったじゃないか」

「だって、この子ったらどうしても寝なかったのよ。あたしがちょっとでも出掛けるそぶりをすると、自分だけ置いてけぼりにされやしないかと心配らしくて、探してしょうがないのよ」

「ふん、ずいぶんと懐いたもんだな」

「だって、しょうがないでしょう。この子にとっては、あたし以外には頼れる人がいないんだから……」

「ま、そりゃそうだが……。だが餓鬼を負ぶったままじゃ、せっかく二人が会ったというのに、どう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しようもないじゃないか？」
「大丈夫よ。いまぐっすり寝込んだばかりだから、このままそうっと降ろしておけば構わないわよ」
「しかし、途中で目でも覚まされたらうまくないぜ。ここは堤防だから危いし、それに気分も白けちゃうからな」
「そんなら、眠っているまま、ここの棒杭に括りつけておきましょうよ。それだったら、目を覚ましても動けないから……」
「そうするか。起きないようにうまく縛っておけよ」
自分が眠っていた暗闇の時間の中で、男と女の間にこんな会話があったろうことなど、この男の子は知らない。よしんば彼が目覚めていて、二人の会話を聞いていたところで、それがどんなことを意味するのか、理解することもできなかったであろう。
深い眠りの中に落ち込んでいた男の子は、耳をつん裂くような轟音で目を覚ました。そこは堤防の上の鉄橋のすぐそばだった。黒い巨獣にも似た貨物列車が、大気をかき乱しながら通過していった。
列車の通過が終わると大気の振動は急激に静まり、周囲は再び部厚い静寂の幕に押し包まれた。そして男の子は、どうしたわけか身動きのできない自分を発見すると同時に、母と信じていた唯一の庇護者を見失ってしまったのだった。
ライオンの仔でも蝮の仔でも、幼少のうちは無力な仔鼠とまったく同じものだ。彼にとって許された表現は哀れっぽい声を出して泣くことだけである。
哀れな声をあげて泣けば、母獣がその声を聞きつけて飛んで来るものと信じているのだろうか……。彼は、自分が立っている場所から十メートルと離れていない鉄道線路の上に、女が胴体と首と、両手、両脚をばらばらに切断された状態になって転がっているのを、まったく知らなかった。

轢断死体の女はまだ若い年齢だった。死に顔からの推定では二十四、五歳だろうか。それに上品できちんと整った身装をしていた。臙脂色の高級なセルの単衣に黒っぽい名古屋帯を締め、真新しいキャラコの白足袋を履いていたし、顔はかなり濃い目の化粧をしており、髪はパーマをかけていて都会風の整った美貌の持主だった。

死亡したと推定される時刻は、午後八時五十五分である。場所は宮城県遠田郡小牛田町の北辺——東北本線の小牛田、田尻の両駅の中間にある江合川鉄橋の南の畔。田尻駅を午後八時四十六分に通過した上りの貨物列車が、九分後に江合川橋梁を渡った——それに轢断されたのであった。

女は上り線の軌条の上に直角に体を横たえて、万歳をするような格好で両腕を頭上に伸ばしていたらしい。切断された頭部と両腕は、上り線と下り線の中間の砂利敷きに転がっており、膝関節のすぐ下を切断された両足は、軌道の路肩の草むらのあたりまで飛んでいた。

その草むらの上には、彼女の所持品と思われる黒塗りの下駄と、チョコレート色の牛皮に金メッキの口金がついたハンドバッグが、きちんと並べてあった。

2

貨物列車の機関士は、この女を轢断しながら異変にはまったく気づかずに通過したようである。そのために、変死体の発見者となったのは、小牛田警察署に勤務する中町国男と番場洋次という二人の若い巡査だった。

「自分たちはそのとき、定時巡回をしていた途中でありました。西方の北浦方面から自転車を走らせて、牛飼の三つ又の地点に着いたのは、大体午後九時二十五分頃でありました」

「自分たちはそのまま牛飼を通過して、東北本線の陸橋の下をくぐり、小牛田橋の方に向かいました。

すると、陸橋の下を過ぎてからすぐに、風に乗って流れてくるような、かすかな子供の泣き声のようなものが聞こえてきたのであります」

中町と番場は二人とも巡査を拝命してから一年程度しかたっていない。変死体を発見することなどはじめての経験であった。二人は興奮気味にこもごもに発見時の模様を上司に、以上のように報告した。

中町も番場も、最初は自分の耳を疑った。そこは牛飼地区から四百メートルほど離れていて、あたりには人家がまったくない場所なのだ。暑い夏の夜ならばまだしも、冷気を感じられる秋の夜の――それもかなり更けた時分に、そんなところに子供なんぞがいるはずがない。

(空耳だろう)

二人はそれぞれに思って、通り過ぎようとした。

だが、今度はもっとはっきりと聞こえた。間違いなく子供の泣き声だ。左手の堤防の方角から聞こえる。警察官として見過ごすことができない。

二人は同時に自転車を止めて街道の端に立たせると、左手でサーベルの柄を握りしめて堤防と街道の間にある畑を小走りに横ぎった。

(誰かがあんなところに捨て子でもしたのだろうか?)

中町と番場は走りながら、そんなことを想像した。

堤防を駈け登った二人が暗がりの中で最初に見たのは、棒杭に体を括りつけられて泣きじゃくっている幼児だった。

とにかく、急いでその子の兵児帯の結縛を解いてやった。そして、倒れかかってくる子供の体を受け止めて理由を訊いたが、この子が、二人の巡査に対して納得のゆく説明をできるわけがない。彼自身でさえ、何も理解できないでいるのだ。

だが二人の巡査が、すぐそばの線路の上の惨たらしい情景を発見するまでには、大して時間を必要としなかった。たとえ彼らが警察官でなかったとしても、夜の堤防の上で幼児が棒杭に結縛されているのを見つけたら、必ず不審を感じてその周辺を調査して見ることだろう。

そして、子供が括りつけられていたところから数歩も線路の方に歩み寄ると、夜の大気の中にはっきりと血腥さが漂っていたのだ。

中町巡査が幼児を抱きかかえて残って現場を保存し、番場巡査が牛飼地区まで走って、もう寝ていた一軒の家を叩き起こして電話を借りると、変事を本署に報告した。

死体となっていた女と、括りつけられて泣いていた幼児の名前は、現場での捜査だけで簡単に判明した。鉄道の路肩の草むらの上に、下駄といっしょに並べてあったハンドバッグの中に、女の遺書が入っていたのだ。

ハトロン紙の封筒に便箋紙が一枚たたんで入れてあって、

「ご迷惑を掛けてまことに申し訳ございません。頼りに思う人にも去られ、お金も無くなり、小さな子供をかかえて女一人で生きてゆくことが耐え難くなりました。絶望の末に死の道を選びます。

子供も死の道連れにと考えましたが、母親の身でわが子を手にかけることがどうしても出来ません。後に残して参ります故、どうか情深い方に引き取られるようお願いします。

子供の名は禮と申しまして、昭和十八年十二月二日生まれでございます。

木内志津江」

と書いてあった。

鉛筆だが、美しい書体の女文字であった。

この遺書の他には、現場には彼女や子供の身元を証明するような書類は何もなかった。

しかし別の方面からの情報で、その住所も直ちに判明した。
事件が鉄道用地内で起こったことであり、彼女の死因が列車による轢断死という事実には疑う余地がなかったので、警察の現場検証には小牛田駅から宿直の助役他三名の鉄道職員が駈けつけて、警察官たちに協力した。その中に若い改札係の男がいて、彼女のことを記憶していた。
――その日、昭和二十年九月二十九日の午後六時十分頃に、上野駅始発の青森行き急行列車が小牛田駅に到着した……。
「その降車客の中に、たしかにこの女の人もいましたよ」
と改札係が証言した。
改札口を出たときの彼女は、紺絣のモンペに同じ柄の標準服を着ており、右手に大型の茶色の皮トランクを持ち、左手にはよちよち歩きの子供の手をひいていた。そして、
「あのう、遠田旅館というのは、どこら辺にあるのでしょうか?」
と、改札係に訊ねた。
東京弁のその口のきき方や、若い女性の都会風の美貌が、若い鉄道員の記憶に鮮明に残っていたのである。
現場検証の指揮を取ったのは、小牛田警察署の次長で刑事課長を兼務していた千賀英光という若い警部だった。小牛田署の署長は茂木新一郎という初老の警視だが、たまたまこの夜は千賀次長が宿直番だったわけである。
千賀警部は、即座に二人の刑事を遠田旅館にやった。
小牛田は小さい町で、旅館は四軒しかない。いずれも駅の周辺にあって行商人たちしか泊まらないような安宿ばかりだが、遠田旅館はそれらの中では一番高級な方である。
その母子は、間違いなく遠田旅館の投宿客だった。

宿帳には、
東京都葛飾区水元小合町一×××番地　　無職　木内志津江　二四歳
他一人

と記載されてあった。
遠田旅館の主人の鎌形万蔵は、二人の刑事に向かって、
「あんのう二人の親子は、うちにとっちゃあまるっきりのしもしやねえ、はじめてのお客さんですだ」
と語った。
母子は、夕方の六時十五分過ぎに旅館の玄関に入って来た。母子連れの客というのは珍しいが、女の身装や顔つきが悪くないことや、大きなトランクの荷物を持っているのを見て、鎌形万蔵は安心して二階の北側になっている八畳の部屋に通した。
夕食は用意して持ってきたとのことで、旅館ではお茶しか出していない。母子は食事が済んでからもしばらくひっそりとしていたが、八時近くになって、身装を変えた女が子供の手をひいて下りてきて、
「ちょっとだけ出てきます」
といい残して外出したとのことである。
刑事たちが遠田旅館を訪れたのは夜中の十二時に近い時刻で、旅館はすでに表戸を閉めていた。鎌形は、宵の口に外出した母子の客が戻らないので多少は気にしていたが、
「きっと、親類か知り合いの家を訪ねて行って、のうのうとへらついているうちに時間が遅くなったので、そのまま先方に泊まったのだろう」
と考えていたという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com